

随伴変換

V を n 次元複素計量線型空間とし、 $x, y \in V$ に対して $(x|y)$ でエルミート積を表す。また、 T, S を V の線型変換とする。

1 定義

(1) 随伴変換

任意の $x, y \in V$ に対して $(T^*(x)|y) = (x|T(y))$ が成り立つような V の線型変換 T^* を T の随伴変換と呼ぶ。

(2) 正規変換、エルミート変換、ユニタリ変換

それぞれ $T^*T = TT^*$ が成り立つとき T は正規変換、 $T^* = T$ が成り立つとき T はエルミート変換、 $T^* = T^{-1}$ が成り立つとき T はユニタリ変換であると言う。

2 随伴変換の存在と一意性

(1) 存在

V の正規直交基底 (シュミットの直交化法によって必ず存在する) を任意に一つ取って固定し、それを $\langle e_1, e_2, \dots, e_n \rangle$ とする。ここで $x \in V$ に対して $T^*(x) = \sum_{i=1}^n (x|T(e_i))e_i$ と置けば、 T^* は V の線型変換である。 $y \in V$ を任意に取って、 $y = \sum_{i=1}^n y_i e_i$ とすると、 $\langle e_1, e_2, \dots, e_n \rangle$ が正規直交基底であることから $(e_i|y) = \bar{y}_i$ であることに注意する。

$$(T^*(x)|y) = \left(\sum_{i=1}^n (x|T(e_i))e_i \middle| y \right) = \sum_{i=1}^n (x|T(e_i))(e_i|y) = \sum_{i=1}^n \bar{y}_i (x|T(e_i))$$

一方

$$(x|T(y)) = (x| \sum_{i=1}^n y_i T(e_i)) = \sum_{i=1}^n y_i (x|T(e_i))$$

であるから $(T^*(x)|y) = (x|T(y))$ が成り立つ。

注意：上記は正規直交基底 $\langle e_1, e_2, \dots, e_n \rangle$ による T の行列表示を A とし、その A の随伴行列 A^* に対応する V の線型変換を T^* とするのと同じである。

(2) 一意性

f, g を V から V への写像とする。任意の $x, y \in V$ に対して $(f(x)|y) = (g(x)|y)$ が成り立つとすると $0 = (f(x)|y) - (g(x)|y) = (f(x) - g(x)|y)$ であるが、ここで y は任意だから $y = f(x) - g(x)$ と置けば $\|f(x) - g(x)\|^2 = (f(x) - g(x)|f(x) - g(x)) = 0$ となる。よって $f(x) - g(x) = 0$ である。従って $f(x) = g(x)$ であり、 x は任意だから結局 $f = g$ である。

T_1^*, T_2^* を T の随伴変換とする。任意の $x, y \in V$ に対して $(T_1^*(x)|y) = (x|T(y)) = (T_2^*(x)|y)$ であるから、上記で示したことにより $T_1^* = T_2^*$ が分る。

注意：以上のことから正規直交基底による T の行列表示を A とするとき以下が成り立つことが容易に分る。

1. T が正規変換 $\iff A$ が正規行列
2. T がエルミート変換 $\iff A$ がエルミート行列
3. T がユニタリ変換 $\iff A$ がユニタリ行列

3 *の性質

1. $T^{**} = T$
2. $(TS)^* = S^*T^*$
3. $(T + S)^* = T^* + S^*$

これらはそれぞれ以下の計算と「2節(2)の一意性」から分る。

1. $T^{**} = T$

$$(T^{**}(\mathbf{x})|\mathbf{y}) = (\mathbf{x}|T^*(\mathbf{y})) = \overline{(T^*(\mathbf{y})|\mathbf{x})} = \overline{(\mathbf{y}|T(\mathbf{x}))} = (T(\mathbf{x})|\mathbf{y})$$

2. $(TS)^* = S^*T^*$

$$((TS)^*(\mathbf{x})|\mathbf{y}) = (\mathbf{x}|TS(\mathbf{y})) = (T^*(\mathbf{x})|S(\mathbf{y})) = (S^*T^*(\mathbf{x})|\mathbf{y})$$

3. $(T + S)^* = T^* + S^*$

$$\begin{aligned} ((T + S)^*(\mathbf{x})|\mathbf{y}) &= (\mathbf{x}|(T + S)(\mathbf{y})) = (\mathbf{x}|T(\mathbf{y}) + S(\mathbf{y})) \\ &= (\mathbf{x}|T(\mathbf{y})) + (\mathbf{x}|S(\mathbf{y})) = (T^*(\mathbf{x})|\mathbf{y}) + (S^*(\mathbf{x})|\mathbf{y}) \\ &= (T^*(\mathbf{x}) + S^*(\mathbf{x})|\mathbf{y}) = ((T^* + S^*)(\mathbf{x})|\mathbf{y}) \end{aligned}$$

4 固有値

(1) エルミート変換の(従ってエルミート行列の)固有値は実数である。

T をエルミート変換、 α を T の固有値、 \mathbf{a} を α に対応する T の固有ベクトルとすると

$$\bar{\alpha}(\mathbf{a}|\mathbf{a}) = (\mathbf{a}|\alpha\mathbf{a}) = (\mathbf{a}|T(\mathbf{a})) = (T^*(\mathbf{a})|\mathbf{a}) = (T(\mathbf{a})|\mathbf{a}) = (\alpha\mathbf{a}|\mathbf{a}) = \alpha(\mathbf{a}|\mathbf{a})$$

よって $\bar{\alpha} = \alpha$ なので α は実数である。

(2) ユニタリ変換の(従ってユニタリ行列の)固有値は絶対値が1の複素数である。

U をユニタリ変換、 α を U の固有値、 \mathbf{a} を α に対応する U の固有ベクトルとすると

$$|\alpha|^2(\mathbf{a}|\mathbf{a}) = \alpha\bar{\alpha}(\mathbf{a}|\mathbf{a}) = (\alpha\mathbf{a}|\alpha\mathbf{a}) = (U(\mathbf{a})|U(\mathbf{a})) = (U^*U(\mathbf{a})|\mathbf{a}) = (U^{-1}U(\mathbf{a})|\mathbf{a}) = (\mathbf{a}|\mathbf{a})$$

ここで \mathbf{a} が固有ベクトルだから $\mathbf{a} \neq 0$ 従って $(\mathbf{a}|\mathbf{a}) \neq 0$ である。よって $|\alpha| = 1$ となって、 α の絶対値が1であることが分った。

5 固有空間

エルミート変換の異なる固有値に対する固有空間は直交する。

T をエルミート変換、 $\alpha \neq \beta$ を T の異なる固有値、 \mathbf{a} を α に対応する T の固有ベクトル、 \mathbf{b} を β に対応する T の固有ベクトルとする。 α, β が実数であることに注意せよ

$$\alpha(\mathbf{a}|\mathbf{b}) = (\alpha\mathbf{a}|\mathbf{b}) = (T(\mathbf{a})|\mathbf{b}) = (\mathbf{a}|T(\mathbf{b})) = (\mathbf{a}|\beta\mathbf{b}) = \beta(\mathbf{a}|\mathbf{b})$$

よって $(\alpha - \beta)(\mathbf{a}|\mathbf{b}) = 0$ となるが、 $\alpha - \beta \neq 0$ だから $(\mathbf{a}|\mathbf{b}) = 0$ が分る。